



六月は何か待つ月栗鼠走る
ヴァンゴッホはひかりの使徒や麦の秋
霞切を放り上げたる霞の発条
ざわざわと青甘蔗戦世の近し
ひっそりと影売り街を土用風
青蓮濠埋め尽くす関のこゑ
半夏生草後ろめたくて辺境に
生きたるとは兜太の目玉草いきれ
マドラーに回る梅の実基地の町
句集とふ自画像秋を待つピエロ
飢ゑたる子の顔みな同じ梅雨滂沱
朝焼に地中蠢くものあり
終生が働き盛り花皂莢
睡蓮のやうな眠りをおれに呉れ

*

山百合に出逢いし此処が吾の聖地

小林貴子
岩井かりん
清水逍徑
満田光生
志摩晴樹
川村五子
我妻民雄
唐澤南海子
竹岡みち子
田村道子
金子圭子
五味真穂
小池孝雄
西澤日出樹

石井紀美子

滴りは涙の証し慰霊の日
山梔子の花声明の沁むごとし
逢魔が時落ちし杏子に瑕のなし
空梅雨や象の膚の大地めく
ですますのいつかため口鮎の腸
冷し馬食べるわけにはいかぬだらう
象の死やしんしんと夜のバナナ熟る
コンと鳴くきつねメイクの祭の子
問ひつめるがに真夜中のほととぎす
列島は炎暑類句を責められず
螢火をティアラに組んであげたしよ
夫卒寿このごろなんぢやもんぢやとも
蛞蝓や寂光背負ひ哲学す
源五郎空揚げにして友の家
身を挺すごとき新茶のしづくかな

神作仁子
宮岡光子
田中純子
松井弓
依田ひろ
手島互
草野薫子
宮澤羅夢
宮坂やよい
安部克詠
石川定雄
佐藤初子
高田尚文
下島健
吉沢さよ子

新たな半世紀へ—— 岳俳句九月

同人集・岳集から 553 宮坂 静 生

巻頭言 三十年ほど前に季語の「象徴くずし」を提言したことがある。『俳句原始感覚』一九九五年・本阿弥書店刊参照)。その時は流行りの取り合せの句(二句一章型)を念頭に置いていた。季語を昂揚させ最高に働かせた表現を象徴という。草田男の高名な作、〈勇氣こそ地の塩なれや梅真白〉の季語「梅真白」は象徴表現の好例として引かれる。

第二次大戦さなかの昭和十九年の作であり、「出陣近き教え子に語りて、次の一句を示す」と前置きがある。「勇氣」とは時代背景を踏まえ、かつ人間性に訴える「困難にもめげず生きぬく力」(香西照雄)と解し、「地の塩」という聖書の「山上の垂訓」(マタイ伝)を用いた比喩である。

寒中の寒さにもめげないで花開く白梅の香気を、地の塩としての「勇氣」の詩的結晶としたもの。西洋的思考の見事な表現である。以上のように、季語の象徴表現は人間精神が昂揚した極致を捉える時に成功する。ここで飛躍した言い方をすると、季節の言葉「梅真白」は〈勇氣こそ地の塩なれや〉という人間精神の最高の詩想と一体化しているが、実は、表現したいのは勇氣云々であり、季語の梅花は連想の窓口にあたる手引きの存在ではないか。主人は勇氣云々、梅花は従者。このような取り合せの句でも、梅の花も勇氣云々も互いに絡み合わないで、それぞれ独立しながら、一句全体として不思議な映像を読み手に提供する。そんな面白い句はないか。私はそれを「象徴くずし」と称して自分でも詠み、好例を探

していた。その結果は金子兜太のこれも有名な作に行き着く。梅咲いて庭中に青鯨が来ている 金子 兜太 (『遊牧集』)

「青鯨」とはなにか。兜太が不意に思い出したのは戦時トラク島の海に群れていた鯨の群。海に沈められた夥しい亡骸を食べに来る。あの見慣れていたイメージが、庭に梅が咲く頃に無意識にふっと浮かんだ由。難解な句が一気に身近になった。しかも、梅も青鯨も、そのものとして言葉が自立している。凭れあっていない。私には「象徴くずし」の好例に映る。

最前線の句が詠まれると、それが以後の表現を拓いてゆく。

新たな言葉の照応関係の構築へ—— 六月・栗風走る

六月は何か待つ月 栗風走る 小林 貴子

さりげない巧さがある。六月は梅雨に入るが、特別に何を待つのか。本人もこれとは言わない。「何か待つ」である。栗風がしきりに走る。なにか。不思議だ。北国の栗風でも冬の貯えを準備するにはまだ早い。自然には不思議が一杯。

青蓮 濠埋め尽くす 閑のこゑ 川村 五子

「閑のこゑ」がいい。「蜘蛛の糸」ではないが、平和な蓮池の佇まいを描き、そこに「閑のこゑ」とは、一気に戦国乱世を連想する。かつての学生運動盛んな頃の卑近な騒動とも思われない。上野不忍池の果からの嬌声でもない。不思議。

ヴァンゴッホはひかりの使徒や麦の秋 岩井かりん

「ひかりの使徒」の表現がゴッホの直向きさを思わせる。惜むらくは季語に斬新さが欲しい。直向きさには狂気があ

今月の秀句

飢ゑたる子の顔みな同じ梅雨滂沱 金子 圭子

ガザもウクライナもアフガンもアフリカも。世界は「飢ゑたる子」を無視して和平和平と叫ぶ。または見えないふりをする。真実を虚心坦懐に表現するのが本当の詩人の生存の理由だ。未来を考えないで今の欲だけにきりきり舞いの大人を告発した句である。演劇人の先鋭な空気を掴む駄目押しがある。氣づいていてもみんな黙っていることを押している。

ひとつそりと影売り街を土用皿 志摩 晴樹

現代の世相の陰画を描き、考えさせる秀句である。斎藤茂吉の「めん鶏ら砂あび居たれひとつそりと剃刀研人は過ぎ行きにけり」(『赤光』)を連想する。大正二年作の茂吉詠よりも問題を深く投げかける。人間の影が問題視されたのは広島原爆投下時のこと。銀行の壇石に座っていた「男の影」。実体よりも影に存在感があった。以来、時代は影が重視されよう。それが現代。「影はいらんか、影はいらんか」と土用最中を売り歩く男。男の存在をだれも気づかない。世はいよいよ軽薄に。影売りはひとつそりと今も「影はいらんか」と。

る。そこを突かないとゴッホ像は動かない。

葎切を放り上げたる 葎の発条 清水 道徳

葎の叢から葎切が飛び立った。それだけの光景であるが、植物の葎が持つ力を「発条」と表現したことで弾力が伝わる。節ある水辺の柔軟な生きものの感がわかる。

ざわざわと青甘蔗戦世の近し 満田 光生

沖繩詠。歴史を些細な青甘蔗のざわめきで感じる。それだけ「戦世」に敏感な島人の生きることへの斬新さを捉え、鋭い。

半夏生草後ろめたくて 辺境に 我妻 民雄

水辺に群生し、葉が白くなる。下手な化粧を始めた後ろめたさを抱く植物なのか。淡いユーモアに惹かれた。「はんげ」と呼んで、花はどこと探した。禿になる草かと少年の頃思ったことがある。

生きるとは兜太の目玉草いきれ 唐澤南海子

今でも金子兜太のぎよる目を思い、元気づけられる。最晩年まで世の俳人への鋭いユーモアを含んだ批評眼は健在であった。「あの人の回りには殉死者が多い」など、はっとした。

マドラーに回る梅の実基地の町 竹岡みち子

梅酒のカクテルを作る。ガラスの棒で梅の実が廻る。基地のある町のバアか。あるいは家庭。基地とは戦争の片棒を担いでいる。どこかぞんざい。雰囲気、気配を捉えている。

句集とふ自画像秋を待つピエロ 田村 道子

句集『狼が啼いた夜』(砂子屋書房)を出した。まさに自

画像だ。長年のがんばりから体調を崩す。ひたすら秋が待たれる。ピエロのように。元気元気で、こんなはずではなかったが。

朝焼に地中蠢くものあり 五味 真穂
目が覚める朝焼から地中の胎動へ思いが到る。八ヶ岳山麓住の恩寵のような作が誕生した。

終生が働き盛り花白英 小池 孝雄
白英の花はマメ科、花は薄黄色い。まめに地味であるが、その実は大きなさげのよう。大柄な人を連想させる。生涯現役、働きづめ。百姓はみんなそうであった。実感がある。
睡蓮のやうな眠りをおれに呉れ 西澤日出樹
比喩であるが、身の回りに睡蓮が咲いている。夜は眠る。

今月の秀句

ですますのいつかため口鮎の腸 依田 ひろ
冒険作である。畏まって「ですます」調を用いていたが、気がつくとき、親密にくだけた言い方になっている。鮎の腸をつつくようだ。「ため口」とはくだけた言い方をいう。同じ作者に「またあした夕焼色に杏熟る」もあり、注目した。大変意欲的な作者で、一作ごとに新たな世界を拓いてゆく。西澤洋子の語り部という、俳句以外の活動の窓口をもう一つ持っている。八方美人風ではないが、自然に触れる世界への窓口は広い方がいい。

之頭動物園の花子がそうであった。

象の死やしんと夜のバナナ熟る 草野 薫子

象の棲息地での作か。あるいは象の死を耳にした夜の光景か。前者のようだ。象の好物のバナナが熟れるとは、自然といえば自然。しかし、思いをめぐらせると哀しい気持ちになる。他者への思いを柔軟に持っていることに共感する。

冷し馬食べるわけにはいかぬだらう 手島 互

今では農耕馬を水辺で冷やす光景は見られない。私の少年の日に稀に出会った、懐かしかった。その愛馬を食べるとは。気になっていたことを不意に思い、句にしたものか。珍しい。

コンと鳴くきつねメイクの祭の子 宮澤 羅夢

「コンと鳴く」は枕言葉風であるが、愛嬌がある。祭の舞台での演技を真似たものか。軽さへののりがいい。

問ひつめるがに真夜中のほととぎす 宮坂やよい

稀に、真夜にほととぎすの一声を耳にする。はっと驚き、何か問い詰められている感じになる。微妙な心理を捉えた巧みな句に感銘した。静かな夜には全身が意識を張り巡らしている。

列島は炎暑類句を責められず 安部 克詠

この暑さでは誰もが暑い暑いという句ばかり作る。俳句が即興詩であれば、類句の山は避けられない。なるほど。

螢火をティアラに組んであげたしよ 石川 定雄
この世で、これ以上美しい髪飾りはないであろう。貴婦人

あの眠りが欲しい。叫びが真に迫るのがいい。

山百合の清純さに出会う。ここがわが聖地とはすばらしい覚悟。

山百合に出逢いし此処が吾の聖地 石井紀美子
山百合の芳香は絶品。白い花弁に黄の筋が走り、つつましく美しい。出逢いの一瞬の偶然が永遠を思わせる。若々しい発想だ。作品は自分が実感する独断がないと面白くない。「此処が吾の聖地」がそれ。人に忠実ではなく、自分に忠実だ。

滴りは涙の証し慰霊の日 神作 仁子
沖繩忌詠。ガマ(洞窟)の滴りであろう。私も若い日にひめゆりの塔をはじめ沖繩の洞窟へ入ったことがある。沖繩はガマの国と思ったものだ。涙以外にない。忘れ難い。

山梔子の花声明の沁むことし 宮岡 光子
純白な山梔子の花を見つめる。チベットの仏教音楽、梵唄がしめやかに沁み込むようだという。一日の朝ひらき、日暮れには聞れる。作者の求める境地をそれとなく暗示した句か。

逢魔が時落ちし杏子に瑕のなし 田中 純子
たそがれ時に杏子が落ちる。瑕一つない。どこという句ではないが、熟れた杏子が持つ、全体に漲る緊迫感には強さがある。拾い上げ掌中にした経験が言わしめた言葉である。

空梅雨や象の膚の大地めく 松井 弓
日本に来て梅雨に慣れ象の膚が乾燥する。痛々しい。埃が立つ大地の感じ。辛さを表現できないだけに一気に弱る。井

の頭部を飾る光の冠。生氣に満ちた自在な動きが持つ気品。

夫卒寿このごろなんぢやもんぢやとも 佐藤 初子

語呂合わせの遊び。しかも夫へのやさしい思いやりがある。

蛭蟻や寂光背負ひ哲学す 高田 尚文

これはまた崇高な考え深い蛭蟻仏。浄土からの寂光を背に、この濁世の果を思案してござる。ありがたやありがたや。

源五郎空揚げにして友の家 下島 健

これは驚き。わが幼馴染の源五郎が空揚げにされ、食べられるとは。ああ哀しいかな、哀しいかな。

身を挺すことき新茶のしづくかな 吉沢さよ子

新茶を淹れる。その作法では、最後の一滴の搾りまでを入れる。寸分も隙がない完璧を尽くすとは、たかが茶ではない。これはこれは大変なことになりました。可笑しみもあるう。

他に推薦候補作をあげる。

ふるさとへ田草を取りに呼ばれけり 倉科 繁登

ラパウルの父を偲べば螢来る 渡嘉敷皓駄

屋敷の葉をもて蠅たたく終戦日 櫻井 喬二

棕櫚の葉をもて蠅たたく終戦日 瀬戸 正男

葎の夜な夜な星と交信す 布山千土里

葎や天には宇宙ステーション 山越 松子

露草の競ふことなくみんな咲く 小口 洋子
梅雨めくや遠い記憶の木の匂ひ 塩澤 祐子